

甘蔗の害草ナンバンギセル (*Aeginetia indica* L. var. *gracilis* Nakai) について

大内山茂樹*・酒匂三千夫*

OUCHIYAMA, S., and SAKO, M. *Aeginetia indica* L. var. *gracilis* Nakai
as A Parasitic Plant of Sugarcane.

甘蔗の害草としてのナンバンギセルはアジア南部において早くから知られているが、わが国での報告は見当らない。種子島においても従来ナンバンギセルによる被害例は聞かなかつたのであるが、1955年これが被害蔗園を発見しその被害状況を調査する機会を得たので、ここにその概要を報告し大方の参考に供する次第である。本種の鑑定をわずらわした国立科学博物館大井次三郎博士及び調査に協力された坂元茂技官、芝亨、日高義治氏に謝意を表するものである。

ナンバンギセルの性状 ナンバンギセルはハマウツボ科に属する1年生寄生性草本でススキ、甘蔗或はメウガ等の根に寄生し、茎は短く殆んど地上に出ず分岐して5~10 mm 長の狭三角形の鱗片を少数着け、小

梗は4~5本直立し帯赤色、無毛、やや肉質で高さ20~30 cm にして鱗片を欠ぎ、淡紅紫色で3~5 cm 長の側向する花を単生する。萼は舟形にして長さ2~3 cm、花冠は筒部長く、裂片は扁円形 やや肉質である。薊は1~1.5 cm 長で1薊に種子数千を有する。本種は全日本に分布し、母種タイワンギセルは本種より大形にして琉球、台湾、印度、マレーシャに生ずる。

甘蔗の被害状況 調査圃場は鹿児島県熊毛郡西之表町安納字春之小田の東にゆるく傾斜した1反2畝歩の圃場で品種は2725 POJ、栽種距離は3×1尺の新植である。耕作者中園道夫氏は9月初旬頃より発生し初めたがその侵入経路は不明であると言ひ、甘蔗成熟初期の11月末の観察では圃場の東部と北西隅の被害最もひとく、南西部には殆んど発生していなかつた。

* 九州農業試験場

11 月 22 日ナンバンギセルの発生していない部分と発生部分とよりそれぞれ 2 ケ所を選び、1 ケ所 15 株宛計 30 株の甘蔗についてナンバンギセルの発生状況及び甘蔗の生育を調査した結果は次表の通りで、被害の特にひどい茎で枯死したのも若干みられた。

結言 ナンバンギセルの寄生により甘蔗は草丈、茎径を減じ特に生葉数、糖度の低下は顕著で本種の甘蔗

栽培に及ぼす影響は極めて大きく、その発生、防除については特に注意する必要があるが、桐生知次郎氏によれば防除法として 1. 地上抽出前の 1 週間帯水 2. 開花前の刈取焼却または埋没 3. 被害蔗園よりの採苗禁止 4. 早期収穫 5. 株出の禁止及び他作物との輪作 6. 収穫後枯葉と同時に薊の焼却等が有効のようである。

項 目	甘蔗 30 株当のナンバンギセル				甘 蔗 の 生 育, 糖 度						
	生 存 数 株	枯 死 数 株	合 計	甘蔗 1 株当数	草 丈	茎 長	生葉数	茎 径			Brix
								上	中	下	
健 全 部	0	0	0	0	cm 170.6 ±2.068	cm 109.5 ±1.552	6.74 ±0.098	cm 2.56 ±0.029	cm 2.87 ±0.027	cm 2.93 ±0.026	11.79 ±0.243
被 害 部	48	97	145	4.8	151.1 ±1.869	106.4 ±1.756	2.86 ±0.101	2.21 ±0.020	2.64 ±0.025	2.84 ±0.028	7.43 ±0.169
差	—	—	—	—	19.5 ±2.787	3.1 ±2.344	3.88 ±0.141	0.35 ±0.035	0.23 ±0.037	0.09 ±0.038	4.36 ±0.296

参考文献 台湾農家便覧 第 6 版 (1944), 1016 林竹松; 蔗農便覧 (1942), 395 大井次三郎; 日本植物誌 (1953), 1062 牧野富太郎; 日本植物図鑑 (1948),

130 佐々木舜一; 台湾植物名彙 (1928), 371 園原咲也, 外 3 名; 沖繩植物誌 (1952), 142